血脈資料『諸嗣宗脈紀』について

――龍谷大学本を手懸かりとしたその成立とデータ公開を巡る問題――

宇都宮　啓　吾

一　はじめに

従来より、仏教史学の視点や訓点資料を対象とする国語史学の視点、また、その他の様々な視点から、聖教や教学の伝授を巡る問題を考えるために、その根拠となる血脈資料が注目され、これらに基づいた分析も行なわれている。

そのため、今後とも研究の基礎資料たる血脈類の収集とその公開は果たされるべき重要な課題の一つとして認識しており、稿者自身、その成果の若干を次の如く行なったところである。

- 拙稿「東寺観智院金剛蔵『天台血脈』について」（『大谷女子大学紀要』第38号　平16・2）
- 拙稿「『諸嗣宗脈紀』抄――法相宗部――」（『国文論叢』36号　平18・7）

これらのうち、後者については、諸般の事情により、『諸嗣宗脈紀』の若干の紹介と一部の翻刻（法相宗部）のみの公開に留まっており、その詳細な検討と本文全体の公開の必要が存する。

そこで、本稿では、前稿を承ける形で、血脈資料として豊富な情報を有する『諸嗣宗脈紀』の紹介として、その写本である龍谷大学図書館蔵本を手懸かりとした作者とその成立の事情について言及し、併せて、そのデータ公開としてのデータベース化の問題について述べることとしたい。

二　従来の言及

前稿と重なる部分も存するが、本書の概要について述べてみたい。

『諸嗣宗脈紀』は、江戸時代前期から中期頃に成立した諸宗派の師資相承の血脈を記録した書として知られ、従来より師資相承を巡る問題を検討する際の資料として利用されている。

その制作意図については、享保版本の識語によれば、以下の如くであり、

法燈之相継莫甚於今、独以無法脈之書、
自毎為恨苟不知伝燈之脈次、則無由覈其
蘊奥故、余竊集録之而以為后学之一助、
蓋脈絡糾紛頗有錯乱乎、可畏為法正焉

「法脈之書」の無いことを憂い、自ら「后（後）学之一助」とせんが為に制作したものと考えられる。

本書に記される系図を本書の「宗図目録」に従って提示すれば以下の如くであり、浄土真宗や禅宗の類の系図は存しないものの、幅広い系図を載録していることが知られる。（丸括弧で囲った部分は「宗図目録」自体に記載はないが、本文中の系図として記載のあるものを示した。）

宗図目録
小乗二十部　十誦毘曇薩婆多宗　四分律宗（西大寺歴住長老位）
毘曇倶舎宗　成実宗　摂論宗　法相宗（四明房）（未詳源流）
三論宗　浄土宗　楞伽宗天台宗（声明伝・密灌頂伝　涅槃宗）
地論宗　華厳宗　真言宗（醍醐座主・聖宝益信下・小野六流・広沢六流・五入唐）
真言灌頂諸師図系
律宗受具師資横図
天台伝経法師総図

右の一覧によって、本書が南都六宗並びに天台宗・真言宗を含み、所謂「八宗」の系図を網羅しているところには注目できるものと思われる。

右の如く、仏教史学や国語史学等々における基礎資料の一つとして考えられるだけの価値を有するにも関わらず、前稿で述べた如く、その全文が公開されておらず、また、書誌的な問題やその内容に関する問題についての検討についても未だ不十分なように思われる。

例えば、『国書総目録』においても書名と刊行（享保三年）と所在のみで編者については言及されていない。

また、仏教書の基本的な情報を記載する『仏書解説辞典』によれば、前稿において述べた如く、享保三年刊・二巻とされる『諸嗣宗脈記』と刊本で一冊とされる『新刊諸嗣宗脈記』の二種が記載されている（孰れも「紀」字が「記」字となっている）が、これら二点を原本で検討したところ[1]、その刊記には、共に「享保三戊戌年正月吉祥日／帝都書林　柳川定栄藤屋武兵衛門開板」の刊記を有する上下二冊本で本文も一致していることが確認できた。

かくのごとく、『諸嗣宗脈紀』は、その基本情報である編者やその成立の経緯、また、書誌的な情報についても未だ明らかになっているとは言い難い状況にあり、こういった状況は、本書『諸嗣宗脈紀』の利用の上で、大きな問題が存するものと思われる。

そこで、右の如き問題を考える為に、この度新たに調査の機会を得た龍谷大学図書館に所蔵されている写本（以下、「龍大本」と称す）を対象として検討することとしたい。

三　龍大本の検討

龍大本は、袋綴装（四目綴・縦23・3㎝×横16・2㎝）の一冊（墨付き77丁）で、外題には貼題簽で「諸嗣宗脈記全合冊」とある江戸時代中期頃に書写されたと思われる写本である。その奥書には以下の如き記述が存する。

右宗派鳳潭老師考之尚様謄写処々改図易釣耳
元禄十有五壬午年夏七烏書

この奥書から、龍大本は鳳潭によって起草された草稿本が尚様（なおざま）に謄写されたものであり、その謄写は元禄十五年（一七〇二）であったことが知られる。

鳳潭は、摂津池田（一説には富山）の出身で喜多宗伯の子として生まれ、延宝二年（一六七四）に河内法雲寺で出家し、黄檗宗の道光に師事、この道光の勧めで華厳宗復興

を志し、後に南都で華厳・唯識・三論等を修め、比叡山で密教を相承した人物とされる。

龍大本はその書写が「尚様謄写」であることから、鳳潭の起草に忠実な本文であると考えられるが、次に示した此書の冒頭の「法相内明系図」（法相宗系図）の識語の記述に注目できる。

法相内明系図終　〈已上系図潭師本／別軸今為合冊〉

この記述から、鳳潭起草の系図（『諸嗣宗脈紀』の元か）には法相宗の系図が存しておらず、鳳潭が別に作成していた軸装の法相宗系図を合わせて龍大本としての形にしたことが窺われる。

即ち、この記述から、鳳潭起草時の形態は現在流布している形態ではなく、現行流布本には後人による編集等の手の加わっていることが知られる。

従来、『諸嗣宗脈紀』について言及される場合、先行研究の中では、「鳳潭が製したと思われる『諸嗣宗脈紀』[2]」といった形で、その編者として鳳潭を宛てる場合も存するが、この識語を参考とするならば、『諸嗣宗脈紀』の編者をそのまま鳳潭に宛てることには注意を要するものと考えられ、『諸嗣宗脈紀』の草稿時点は確かに鳳潭と考えられるものの、鳳潭起草時の形態は現在流布している形態（享保版本）とは異なっており、現行流布本は後人の手による編集等の手が加わっているものと考えられる。

そこで、龍大本と現行流布本たる享保版本とを比較することによって、どのような形で本文に編集・改編等が加えられているのかを確認し、現行流布本の本文内容自体に関する位置付けをも考えることとしたい。

以下、上段に龍大本の本文内容の概略を示し、下段に龍大本と対応する享保版本の内容（但し、両者では配列が異なっているため、享保版本の配列の順を①、②の如く示した）、特にその相違を中心として対比させることによって、両者の編集・改編の有り様を見ていくこととしたい。

（享保版本に付した●は、龍大本と大きく異なる記述を示す）
（享保版本の上に付した番号・「目録」の注記は、享保版本における配列序列を示す）

（龍谷大学本）

「法相内明図系」
系図の後に四明房・四伝付載
○四明房の名称
○西域記十駄那羯磔迦国・・・
○興福寺空晴伝
○東大寺等定伝
○等濮陽報城寺智大師伝　浪華僧濬鳳潭撰

「小野六流」
「五入唐」
「広沢六流」
「真言伝法灌頂血脈系図」

（享保版本）

⑦
●四明房の血脈として増補。
●上記の四伝が無い。

⑮
●排列が以下の如く異なる。
「真言伝法灌頂血脈系図」
「小野六流」
「広沢六流」
「五入唐」
●追加情報
「醍醐寺座主」の血脈
「聖宝益信下」の血脈

「律宗受受具師資横図」
○俊芿の系図
○西大寺歴代長老
○梵網八帖抄
○「△凝然所撰律宗・・・」
○「○戒如覚真両哲・・・」
○「○円晴大徳・・・」
○「○覚盛大法初居興福寺・・・」
○以下、証玄・真証・尋等・円証・道御・禅恵・慶運・真空・聖守・密厳・信空・惣持上人・幸尊・真円・定舜・智鏡・忍空・恩允・浄因・真照・源俊・願行の伝

③
●「四分律宗」と統合されている。
●血脈として整備されている。
●凝然以下の伝は無い。

「天台伝経法師惣図」
○寂心・尊勝・仏論以下の伝

⑪
「天台宗」
●伝無し

小乗二十部　毘曇雑心　成実　両律付四分律成実論宗
三論　涅槃　地論　摂大業
天台　華厳　法相　浄土

目録
「宗図目録」（本書、享保版本では冒頭部に位置する）
小乗二十部　十誦毘曇薩婆多宗　四分律宗（西大寺歴　住長老位）毘曇倶舎宗　成実宗　摂論宗　法相宗（四明房）（未詳源流）三論宗　浄土宗　楞伽宗　天台宗（声明伝・密灌頂伝）涅槃宗　地論宗　華厳宗　真言宗（醍醐座主・聖宝益信下・小野六流・広沢

楞伽一葉　倶舎

列目於右

六流・五入唐）／
真言灌頂諸師図系
律宗受具師資横図
天台伝経法師総図

華厳論十宗

①「華厳論十宗」

「律宗」
○十誦律毘曇雑心論宗

②「十誦律宗（出三蔵記）　薩婆多（説一切有）　十誦律（羅什弗若多羅）訳」
●「○薩婆多部師資伝　○長安城内斉公寺仏太跋陀羅師宗義伝○付法蔵伝」の部分は享保版本の増補。

「四分律宗」

③「四分律成実論宗」
●「西大寺歴代長老」の血脈が増補。

「毘曇宗」

④「毘曇宗　倶舎宗」
●日本僧侶の血脈の増補。
●「四哲」の記述の増補。

「成実宗経部」

⑤「成実宗経部」

「三論宗」

⑧「三論宗」
●「法華義疏・・・」等の書名あり

「涅槃宗」

⑫「涅槃宗」

「地論宗」

⑬「地論宗」

「摂大乗論宗」

⑥「摂大乗論宗」

「天台宗」
○中国天台宗僧を記載

無
●「天台宗」（項目自体無し）
●特立せず（前掲「天台血脈」と統合）

「禅家五葉」
○伝燈録による一丁分の記述

無
●記載無し（項目自体無し）
（禅家五葉は中国僧の血脈の為、省略される。）

「華厳宗」

⑭「華厳賢首宗」

「法相宗」
○中国法相宗僧の後に

⑦「法相宗」
●「中国法相僧」の記載無し

「△元興寺
護命　守印　守寵　神叡　広達　勝虞
延祥　明詮　平備　施平　長源　峯基
賢応　玄宗
△薬師寺僧
仲継　明哲　長朗　義聖　戒明　慧遠
真恵　隆光　平智　薬仁　義叡　蔵祥　慈念
△西大寺
春演　善□　玄叡　実敏　平詮　中芬
常謄　延善　浮珍
△東大寺
良弁　安寛　標瓊　饒忍　平仁　明一　義済
法蔵　円藝
△大安寺
信叡　令展
玄奘下　霊潤　玄頤　窺基・・・・・・仁嵩

「浄土宗」

（上記「△元興寺」以下の記述は同じ）

⑨
「浄土宗」
●詳細記述
●日本僧侶の血脈を記載（円頓戒脈を増補）

「楞伽一葉」
達磨→明禅師→胡禅師
（中国仏書）
○古因明伝　慙安—長在—真恵—隆光—恵畛—空操
観理南　餘朝北　安秀南　賀秀北　良源北　平忍南
安暁南　能慧北　法蔵南　覚慶北　禅愉北　千到南
智興北　其義南　寿肇北　仁賀仲算　散道師
湛然南　崇寿北　聖救北　円藝仲算　現理

⑩
「楞伽一葉」
●（中国仏書）以下は全て省略

右の一覧から、まず、諸宗派の配列が大きく異なっていることに気付かれる。何より、本書全体の目録としての位置にあるべき「宗図目録」が龍大本では第五項目に位置するところは、龍大本が未だ草稿としての状態にあることを示しており、換言すれば、享保版本においては、全体に亘る大幅な整理が行なわれていることが知られる。

この点は、配列のみならず、律宗の血脈において、龍大本では「律宗受具師資横図」と「四分律宗」との二箇所で記載されているところが享保版本では一つに統合され、又、天台宗の血脈については「天台伝経法師惣図」と「天台宗」として挙げられた二つの血脈のうち、中国天台僧を記載している「天台宗」の項目が享保版本では「天台経法師惣図」に統合され、中国僧の血脈は特立されていない。

このような整理のみならず、中国・朝鮮僧の省略乃至統合は、享保版本においては全体的な傾向であり、享保版本においては、本邦の僧侶を中心とする方向へと改編されていることが知られる。そして、その方針から、龍大本には存しない本邦の僧侶の血脈が享保版本においては増補されていることが、「四分律成実論宗」における「西大寺歴代長老」の増補や「毘曇宗　倶舎宗」における血脈の増補、また、「浄土宗」における「円頓戒脈」の増補等、随所に認められる。その他、享保版本では、血脈における注記部分に取捨選択が行なわれ、結果として、龍大本と享保版本とでは、後者における大きな整理の行なわれていることが

知られる。

即ち、以上を纏めるならば、大略、次の如きことになろうかと考えられる。

1 享保版本では、龍大本に比して、全体に亘る大幅な整理が行なわれている。

2 それに基づいて、排列自体も龍大本とは大きく異なっている。

3 龍大本で記述されていた各宗派の中国・朝鮮の僧侶の多くが省略され、日本人僧を中心としている。

4 宗派の血脈として不足されていると覚しい場合、享保版本では補足されている。

5 享保版本では、血脈における注記部分の取捨選択や増補が行なわれている。

以上の結果から、『諸嗣宗脈紀』は、その草稿、乃至は、起草の段階で華厳僧として著名な鳳潭が関与していたものと考えられるが、版本として流布する段階においては、後人による大幅な編集過程を経て、現在の形に至ったものと考えられる。

四 『諸嗣宗脈紀』のデータベース化の問題

以上の如き検討結果から考えるならば、龍大本は『諸嗣宗脈紀』の成立過程を窺わせる上で重要な価値を有するものと考えられるが、その伝本上の位置付けとしては、享保版本との比較から、内容的には草稿本として考えることが妥当なものと思われ、血脈資料としての完成度という点から考えるならば、享保版本を〝草稿本〟に対する〝改編本〟として位置付けることが可能となる。

この点から考えるならば、血脈資料として豊富な内容を有する『諸嗣宗脈紀』を研究資料として活用する為にデータベース化するならば、その対象としては、享保版本を利用することが有効と考えられる。

一般に、諸宗派の師資相承の問題については、真言宗や天台宗系統、又、鎌倉時代に成立した諸宗派においては印信や血脈といった形でその師資相承が系図として記録された資料が多く存し、とりわけ、真言宗や天台宗では伝法灌頂という形でその法脈が明確化され、その具体的な資料を確認しやすい状況にある。

前稿でも示した智積院智山書庫蔵『安流血脈』の奥書に

は、此書の成立の経緯について、「右此血脈者応安年中興雅僧正註進之／以勅命被会集諸流之系是則於弘／法大師之流為知嫡庶傍正也」との記述から「勅命」に基づく血脈の整理といったことまで行なわれ、師資相承の明確化が確認できる。

その一方で、南都の諸宗派については、前者に比してそのような師資相承の関係が整備された形で伝えられているものが少ないようである。

このような実情を認識するならば、南都の血脈を含む幅広い血脈資料としての『諸嗣宗脈紀』の価値は高いものと考えられ、そのデータ（享保版本）の公開は国語史学のみならず、国文学、仏教史学等々にとっても重要な意義を有するものと思われる。

その為、本書の全文の公開は果たされるべき重要な課題と思われると同時に、本書の内容がデータベースとして公開されるならば、その利用は一層広がるものと思われる。

僧侶の検索を可能とする聖教のデータベース化の問題については従来より報告があり、早い時期の例として、醍醐寺聖教のデータベースに関する永村真氏の論考（「醍醐寺文書記録聖教類データベースの構築について」（『醍醐寺研究紀要』10 法蔵館 平2・3）やシンポジウムとして「歴史資料におけるデータベースの標準」（日本学術会議歴史研究連絡委員会歴史情報専門委員会 H・3）には注目され、聖教を含めた歴史資料に関するデータベースのシステム構築という枠組みの問題については夙に関心が集まり、現在に至るまで大きく進展しつつあるように思われる。その成果としては、東京大学史料編纂所や国文学研究資料館におけるデータベース[3]や、最近では、科研の成果として公開された東寺文書データベース[4]等が注目され、稿者も聖教奥書データベース[5]をインターネット上において公開している。これらのデータベースが僧侶の存在や、その活動の解明に大きく寄与していることは周知のことであり、今後とも広く活用されていくものと思われる。また、本年には訓点資料のデータベースの構築に関する報告も存している[6]。しかし、古代・中世の僧侶の存在とその活動の解明のためには、先述のデータベースのみでは明らかにし得ず、又、従来型のデータベース自体に関する改良も果たされるべきものと思われる。

そのため、稿者らは、以下の如く、関係データベースの手法を用いたデータベースの構築を進めている。

●冨金原賢次・須方嘉彦・森本光洋・宇都宮啓吾・森川弘信・田中猛彦・中川優「関係データベースを用いた平安・鎌倉時代僧侶検索システムの構築」（『研究報告』ソフトウェア工学　２００２年３月　Vol. 2002 No. 23）

●田中猛彦・冨金原賢次・宇都宮啓吾・中川優「平安・鎌倉時代を対象とした僧侶データベースシステム」（情報知識学会誌、2003, 13(3)）

●田中猛彦　冨金原賢次　宇都宮啓吾　中川優「平安・鎌倉時代を対象とした僧侶データベースシステム：概要とその後の展開」（情報知識学会誌、2004, 14(3)）

現在公開されているデータベースは検索中心で、特定情報が「ある」ことを調べるデータベースであるが、現在開発を進めているデータベースは、単に特定情報の有無を調査する単純なデータベースではなく、僧侶相互の人間関係自体を検索できるところに大きな特徴が存し、そこには研究者の研究支援（立体的な検索と考察の補助を行なう）という側面を持つことから、この分野に関わる研究者としては従来気づき得なかった人間関係の発見による新たな視点を見つけだす可能性があるものと考える。特に、最近の歴史学の方でも僧侶を俗世間での血縁関係から考えようとする方法が盛んになりつつあり、稿者も国語学の観点から、この問題を考察したことがある。[7]

そこで、このデータベース構築における僧侶相互の関係分析の視点として、旧稿で指摘したことのある東大寺図書館蔵『弘賛法華伝』の奥書[8]を手懸かりに述べてみたい。

大日本国保安元年七月八日於太宰府勧俊源法師書写畢、宋人蘇景自高麗国奉渡聖教之中、有此法花伝、仍為留多本令書写也、羊僧覚樹記之、

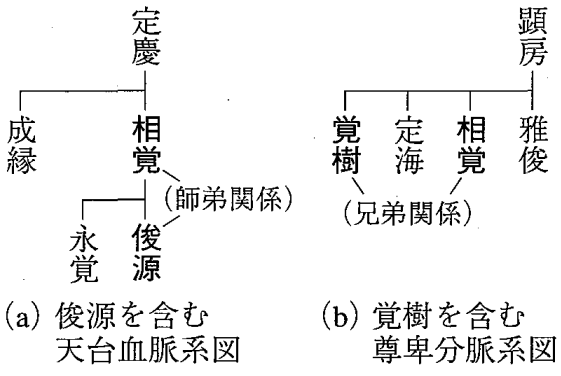
奥書によれば、本書は、東大寺東南院九代院主として三論宗の学僧である覚樹の勧誘によって宋商の荘永・蘇景が高麗に渡り、壱岐嶋で海賊に遭遇しつつも逆に鎮圧して将来した義天版百巻余の一部であったことが知られる。また、本書の書写には、覚樹が俊源に勧めて書写させたことも知られる。系図による検索の結果、俊源は当時、天台僧にその名が確認でき、また、本書に天台宗所用の池上阿闍梨点が使用されていることからも俊源を天台僧として見て

よいものと考えられる。

この時期の覚樹は、東大寺末寺から離れて独自の経済活動を行なっていた筑紫国の観世音寺を改めて領掌すべく九州に下向している時期であり、言わば、東大寺の経済基盤確立という重責を担った行動にあり、[9] 覚樹が全く無関係の、それも他宗派の者と関わっているとは考えがたく、この二人の関係が問題になるところである。

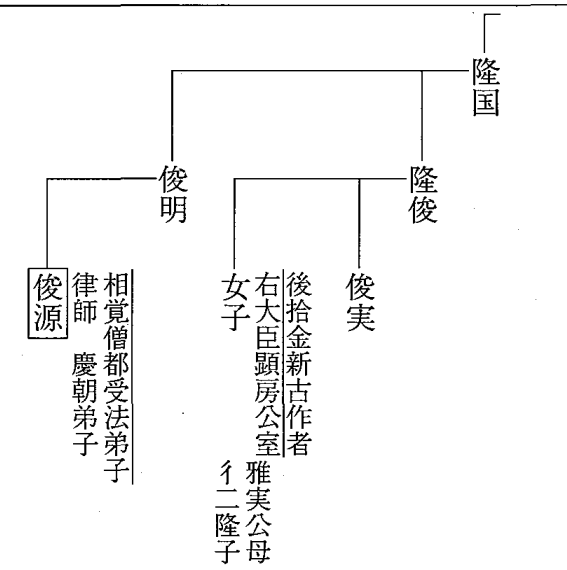
そこで、この二人の関係を調べるならば、【図1】に示した如く、覚樹は相覚の兄弟（『尊卑分脈』）、俊源は相覚の弟子（『天台系図』）といった関係になり、二人は相覚を通じてその関係が明確になる。

【図1　俊源と覚樹の人間関係】



(a) 俊源を含む天台血脈系図　(b) 覚樹を含む尊卑分脈系図

【図2　（『尊卑分脈』）】



『弘賛法華伝』の書写に関して、覚樹とその書写者である俊源は、覚樹の兄弟である相覚を通して繋がりを見出せるが、単に経典の書写ということのみに絞るならば、覚樹は東大寺において数多くの弟子を輩出しており、敢えて他宗派である天台宗山門派の僧侶である俊源を用いる必要はないものと思われる。それにも関わらず覚樹が敢えて他宗派の者に『弘賛法華伝』を書写させている以上、そこには何らかの繋がりが存しなくてはならない。そこで、覚樹・俊源・相覚の関係を【図2】の如く『尊卑分脈』によって考えるならば、覚樹と相覚は兄弟（村上源氏・源顕房の息）であり、俊源のいとこが源顕房の室となっていることが知られる。

つまり、『弘賛法華伝』の書写はこのような血縁関係のもとで書写されていることが予想される。

このように、複数の系図間を横断的に検索し、複数の僧侶の関係性をも明らかにすることができれば、研究上、その資するところは大きいものと考えられ、こ

ういったことを目指している点において、本システムの大きな特徴が存する。

そして、そのような立場から本データベース構築に相応しい資料の検討も必要になるものと考える。

そこで、このシステムに、幅広い宗派の系図を含む『諸嗣宗脈紀』のデータを格納することができれば、諸宗派にまたがる僧侶の関係や、近年、特に注目され始めている十二世紀の〝諸宗交流〟を巡る問題にも資料を提供するものとなり、僧侶の検索やその関係性の検索の幅が更に大きく広がるものと期待される。

このようなコンピュータによる研究支援の問題については、今後とも果たされるべきものと考えられ、この点においても本研究の意義が存するものと考えられる。

五　おわりに

以上、本稿では、未だその資料の公開並びに分析自体が行なわれていない『諸嗣宗脈紀』を対象として、その成立と諸本の本文比較、さらには、そのデータ公開の問題としての資料性とシステムについて述べてきた。

本稿は基礎資料の整備を目的とするものではあるが、その活用には大きな意義を持つものと思われる。今後ともこういった方向における検討と資料調査を研究の一つの柱として行きたい。諸先学のご叱正を請う次第である。

注

（1）智積院蔵『諸嗣宗脈紀』享保版本を用いた。

（2）吉田剛「中国華厳の祖統説について」（『鎌田茂雄博士古稀記念論文集』大蔵出版　平9・11）

（3）東京大学史料編纂所　URL（http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/index-j.html）

国文学研究資料館　URL（http://www.nijl.ac.jp/）

（4）「東寺文書検索システム」（平13・3　東寺文書データベース作成委員会）

（5）「聖教奥書データベース」URL（http://www.orcaland.gr.jp/utsunomiya/）

（6）小助川貞次「デジタル版点本書目の構想について」（第95回　訓点語学会研究発表会　平18・11）

（7）「十二世紀における義天版の書写とその伝持について―訓点資料を手懸かりとした諸宗交流の問題―」（『南都仏教』第81号　平14・3）

（8）注（7）文献

（9）この時期の事情については次の論考で詳しく述べられている。

掘池春峰『南都仏教史の研究』「高麗版輸入の一様相と観音寺」（法蔵館　昭55）

付記

本稿は平成18年度文部科学省科学研究費補助金の研究成果の一つで、第四回韓国日本学連合会国際学術発表会（平18・7・7）の発表に基づいて成稿したものである。

また、諸本の調査に関しては、龍谷大学図書館御当局並びに真言宗智山派総本山智積院御当局にご高配を賜わった。記して深謝申し上げる次第である。

（本学日本語日本文学科教授）